

P5.50

* SENDRYU, Vol. 5, 1943
(poems & essays)

67/14

C

本多華芳先生週忌號

横田 宇五
山内 狂牛

川柳 二和力

木下 城南
竹原 白雀
野間 一知

砂田 九星

柳 雨

市川 土俵

木村 周南
比村 源正

本田 露月

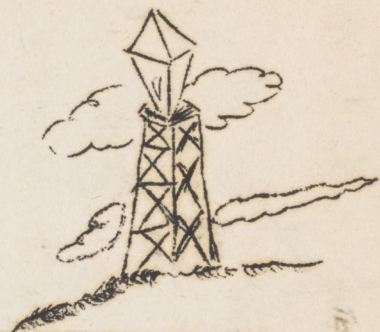
白 宇五
白 宇五

都地 丘

白 宇五
白 宇五

號五第

1943

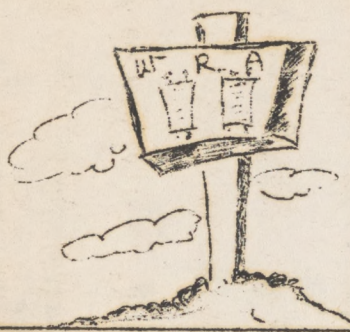


セシリユウ

次

ミニドカ

五 号



表紙 寄せ書

頁

故華芳先生追悼吟

——

3

故華芳先生筆蹟と名吟

——

4

書翰断片

——

本多華芳氏

5

故華芳先生の作品

——

9

マシヤト同人追悼句

——

18

課題吟人特別募集

——

山本竹涼選

19

華芳氏と俳句會席吟、柳華周南章雨藤枝選

23

緑の序曲

——

村田周魚選

27

作句三昧

——

峰香近人

28

川析街頭

——

柳友人

30

第十五回雑誌

——

速舟選

31

第十六回課題「朝」

——

自適選

33

第十七回「多忙」

——

白小選

35

日曜句會互選集

——

37

第十六回雑誌「市川土偶選」

——

41

會計報告

——

44

川柳と繪

——

山本竹涼画

45

編輯室の窓

——

一沙

46

追悼吟故本多華芳先生を偲ぶ

師の写真圖で句會の一周忌 竹涼

天國へ柳はつく伸た頃 吾良知

梅の中身の全更かき手向の句 柳華

追悼の涙が寄つて句會の灯 源正

師の傍を忍んで集ふ一週忌 九星

華芳調査人になつた一ヶ月 土偶

亡き友の残せし華の芳しき 淡洲

津土まで届け沙漠の柳風 溪山

第二佛比つてくれる夢の春潮風 第二佛

印象を追ふ寄書へ師の笑顔 草雨

一年を無駄に過して師に背く周南

夢の間に過ちて師の因心偲ぶ今日 深雪

池の坊活ける華芳に手向花 湖風

合掌の暁に觸れる去年の今日 ひかり

面影は一週句會に生きこくる 一沙

華芳選見へなかつた一ヶ月 自適

思出を語つて集ふ一週忌 白子

師の句調味、深二週忌 藤枝

川柳の歩左を偲ぶ一週忌 向山

一人娘の瞳に父の一年忌 迷舟

津土にも柳は茂る二年越し 愛柳

何日の日か香花手向け師の墓前城南

師の愛し花咲き在りせと偲ぶ かづ子

作句する暁に浮ぶ師のお顔 泉家



子
子
子
子
子

心
心
心
心
心

取

華
華
華
華
華

華
華
華
華
華

書翰断片

本多華芳

只今月三日夜二時です、川柳です段がありませんから最後に差上げる拙書が
お入れて相済みません。何だか死ぬ様うな氣が致しましたのが昨年の夏頃で其の秋
三女程おなだの御家族や川柳人の皆様に主人宅へお出を願ひ私としては是
が皆さんとの最後のお別れで何時死んでも遺憾のない様に致しておいたつ
もりでした。本年のお正月例に依つてお宅へよりお雜煮を頂く時咽喉へ
つかへて能く頂けません事だと思つた、けで夫れが食道癌とはさうく思つて
居ませんでしたが、それから毎日食物の通じが悪くなるのか判り三月中旬には段々駄
目になりました。主婦と娘芳子に勧められてシヤトルの白人専門醫三人に診て
貰ひまして愈に食道癌で抑用も治療も駄目だと見放されました。

。癌と聴きりースが切れたのに氣づき、

私は平氣の手をひいたが主婦に泣かれ、芳子に泣かれたに弱り却つて
私が慰の役に廻りました。醫者に見放されたり死ぬ外なく其死が又是迄
本等で見ました「吾れ生を知らず何んぞ死を知らんや」とか「生死一如」とか
云ふのとは縁が遠く「夜の寐床へ這入る位としか思へませんゆるく休きたい
とも思ひます。芳子はあれ迄に育て大學生へも入れました。川柳は崔善さん

161
柳雨さんとおなたの方のお陰で斯く迄盛人になつて行きました。年齢は常命以上で

附録が付つて居ります。何より嬉しかつたのは死と決定しても毎日愉快に働き、愈々
ヤキマへ出立する時主人夫婦より「芳子は平和になると同時に引き取つて大寺を継
げさせ、お前には永年吾々か世誰になつたお礼に死ぬ迄五丁布つゝ送り別に
病氣に要する金は幾らでも送るから必ずして静養せよ」と云はれました
ので永年びく風車の私は丸で狐につ、まれた心地でシャトルを立ちま
した。醫者に見放された以上はヤキマの剣突さんの療治を受けるのが一歩張
でやつて来ましたら花があり見舞品がありドウダくと柳人が迎へて呉れ
ました。翌日から朝晝洋食を娘芳子作つて晩食は日本人は一日一食
おまんまを喰べないとね例の江戸辯でホテンのお龍ちゃんか腕によりを
掛けて毎晩一汁二菜天婦ら、親子丼かさ豆腐等々と飽かせず変
つた品を作つて呉れました。狐につ、まれてシャトルを立つた私は此処では
全く泉氣に取り入れ一人の名もない私が期く述にされるのは実に
米國の川柳のお陰だとしてつくく感謝せずには居れません。此
此処へ参りましたら又ボ市の柳人が居りますので幸福は益々位加へて
行きました。私の病院のメソドの週には毎日柳人一杯です。此の内

尤の五人が熱心で昨日ノースセンター研究會が組織され三原吉以知、廣田章兩
本田志行、木下城南、登森木魚が會員です、私のな、後はあなたが指導してや
つて下さい。皆さんも夫れを切望して居ます、シヤトル研究會の連中は見舞いす
から可愛かつてやります様、柳孝、九星、勇馬、周南を必に傳へておいて頂かない
見舞品はス市吟社の夢郎さんないか、絶へず送つて呉れ不足の品は此処の
柳人が見附けて呉れます、大ケツチンに極道庵の向山が茶配を振る居り
ますからトニテ品でも同に合せて呉れます、病院の方にはヤキマの中村君
大丸君が居りますから注文すれば何でも作つて呉れます。私は全く天下の
幸福者です、是れが皆川柳かうと思へば死ぬ迄川柳に寸時も惜まれて
筆に口には川柳を休め氣になれません其間は全然病人だと云ふのを忘れ
て居りますから笑に有かたいものです、

一月許り前に余り衰弱がひどかつたからボ市の大学病院へ送られ、た、
其時に遺言があつたのですから可笑しいやありませんか、若しも病院で
死ぬだらう花が好きのですから私の字を花に飾り線香を一本も立てず、
坊さん牧師も断つて呼ばす。イキナリ、ボ市の踊の師匠の三味が

（十四五年ぶりにシャトルでサテに踊を教へて呉れました）モシタホテルの
お龍ちゃん親娘の頃で、越後獅子をやて頂き、次で草雨居のカワ
ボレ、後々陽氣にいと云ふ事を堅く、劉突さんや皆様に頼んで
出張せよ、馬鹿しい平吟など断じてお断り、然し十時か消燈
ですから

○収容所お通夜も十時限りなり

元氣な事は充分以上ありますが、お体附りから四ヶ月半今は全く骨と
皮、どうも惚れとも一ヶ月長くて二ヶ月生きれば拾物と思ひ居ります、
各方面からお祈して居るから是非共生きよと申して来ます。

眞の私の今の心境は

○生きて好し死ねばよく世話はなし

毎日寸暇なく川柳の御用をさせ頂きますから生死の問題は全然
忘れて居ます。

（註）全文は芳先生最後の書翰であつて、上野鈍突先生に宛
たるものである。石山サヤキさんが代筆して居られる。

故本多華芳氏作品

づり来てうしろへ立つは御辞儀だけ
年長の女房亭主を地味に看せ
成功の陰に女房が隠れて居
月給日だけが女房の顔になり
銀行で見まいとすれど窓の金
依估員負かく六丈で死んで行き
ピストルと汽笛に明けて初寐入
アメリカの春風もなし羽子もなし
初夢のレニヤは富士にして祝ひ
碁の立見晩のおかずか間に合はず
桂庵で岡目同士が口で打ち
女房をサン附にして家は無事

おばさんと母のないうちは直ぐなつき
縄跡を遠くから見る乞食の子
英語では母には困る子の喧嘩
子を抱けば直ぐネクタイをおもちやにし
逢ひに行く其のネクタイを氣に迷ひ
ネクタイを隠す女の片えくぼ
赤とんぼ釣竿に来て思案顔
箱庭の釣人は橋の上に置き
ピクニックより亭主へ世話が焼け
一念を字と眞に刺した針のあと
令夫人昔字眞に邊髪
腑甲斐なき親の字眞の皺の見て
子供へは吾氣を手紙別に書き
背のびして漸く入る子の手紙
背ふの子へ持せて手紙入れさせる

景氣よくやりませうと三を下げ

都々逸か御順になつて景氣つき、

飛行機(雲雀長閑に唄はれず

又障子破る飛行機比られる

藁屋根にアンテナがある鶏の声

童謡のうじオハいさな手々も鳴り

義理で来る見舞むらうい顔

病てうより母が見舞を嬉しかり

看護婦へ氣兼ねて来る許嫁

仲のよいお見舞が来て起きたがり

仲人におれと親友付れて来る

略式の嫁は明日から嫁掛け

仲人か後から出来るお芽出たさ、

琴爪をはめさせられた姉の客

花壇よく手入れが出来て父へ客

女客来るとう快を直ぐにほめ

日曜を母悦んで留守居役

教會へ今朝は喜んうい顔

いと母の顔が浮んで寂からず

尊さは一つ／＼の母の皺

人の世に捨てられし子も母に

二日酔もつたいふくも母の世話

再縁を思ひ切らせる子の寂顔

比われて日頃と別を母を知り

酔ぶめり水まで母は置いて呉れ

子を持つて脚質人と母のくど過ぎる

父のない子へ母親は耳をとじ

孔子さ(釋迦さへ母の乳房から

いんと底へ落ちて本当の友を知り

いざと云ふ時当てにした友も逃が

奉加帳亡心れた友を思ひ出し
遠やかな友へ落目の癖み勝ち

絶交は、テナになつてからのこと

果敢なさはあしたの友の欠け

まゝ直す化粧暑へ崩れ勝ち

羨をつれて行かない泳げる子

キャンプもう母が煮し、食に飽き

セキグリス勝つ気、煙草高く愛ひ

不定ならよせとそっぽ煙を吐き

執つ子へ叱かられてある巻煙草

灰皿を持って来た子をほめそやし

鈴虫がチンチロリンと月へ鳴き

小夜砒唄の乙女は月に打ち

葉の露に宿りて月ゆかし

緋鯉今跳ねて砕いた月の影

笑はせろ横顔上戸へ酌こぼし

片言を取りまいて居る笑い顔

話した、腫れを冷かに外向けられ

鼻唄へ話し掛ければ涙を附け

耳打ちに来た香水を軽く吸ひ

酒禁する気を玉子酒から取り返し

起す戸も酔て帰った叩きよう

今乗れた汽車へ動悸の汗をうき

心配な顔が取り巻く水枕

逢はれな、其、或目を寝るの勝ち

死ぬ道も夢に泣いたり笑ったり

まだ速夢が多めならし、妻揚子

五十年夢には余り果敢な男や

その階段レニヤは夢のように浮き、
お互に忘れた頃を夢で逢ひ
とて、母の夢を嬉しく今夕は起
真、剣にならうと嘘が怖く、なり
言譯の嘘も嬉しく、久しぶり
大袈裟にだまされてゐる父の顔
取なしに心で拜む母の嘘
男だと云ふ意地がある、ほかなんぞ
母のな、娘へ男子の思い過や、
人前で取らねばならぬ女房の子
男気を出したばかりに妻の愚意知
兎一人を持てあまして、男の子
本墨打者が子と見えぬ三ホム
大の字に寝る子一人へたより 母

レグイフワースト殿方はお供なり
酔か減を自慢で母のちうじすし
盆踊キラリ、とダイヤの子
三輪車ほめれば早い足を踏み
揚げ足を取られ自慢は情づゑる
話と今俺らが国やとなつた聲
子一人へ祝の希望はありつたけ
渡来した頃の希望を欠いた、今い
は立派な希望ですと冷たい眼
は希望に添へない、澤が冗長する
ま、事に皆父の癖、母の癖
久しぶり、女らぬ癖も親しまれ
眼を外らす癖も、落目になぞから
夕立の晴れて、虹今塔の上

夕餉待つおききはみんな母にせ
からみた藻をゆるやかに金面抜け
妻の瞳にデパート慾い物ばうり
乙女もつ恋知りそめし髪かたち
カーペット子の泥靴へ気が疲れ
快りい心を叱る旅の恋
旅戻りすは膝に乗り肩に乗り
もう妻と旅りをしな事にきめ
黄昏る鐘の音聞く旅の空
貸込衣橋の上をきて来て帰り
熱の子の母理をなだめてため涙
瘦せ馬に扶めるだけ被み鞭をあけ
金のある今業平へ娘は嫁ぐ気
結局は母理がこうした裏長屋

お百度に母理を必死の神頼み
空風壁の古新聞踊り
咲も風散らすも春の風次
ほろ酔の顔へ吹く風唄になり
糸をふわりふわり飛んで破れ
風揚のちる帰らな夕餉時
もういと落葉をふり秋の風
木を倒す風も明日は花に咲き
黄昏る路次を出てゆく引眉を
交代の時胃が長い生あへび
日曜をゆたりとしこ子の相子
引け前の五分が長い腕時計
寝忘れも母にすまないうを云い
同僚へ交際受けを妻にげし

一三

むの腹立てと妻子の明日折れ
若き日の吾をほろい花の留守
姫百合のはつちやさる崖に咲き
ちが花へ出たい心の妻をけり
花の雨迎への傘へあふと酔い
花祭母もお稚児の刷毛ついで
明日と云ふ事はうへ気が疲れ
いよい児の名をやめる六日の夜
死が招く明日とも知らずがみ合
子一人を力に明日をもち續け
明日へ気が付けば淋し事はう
張る乳へ涙所とからあともう出
ただ父も母も見えなほ民館
泣いて来る手へ同大も暮れ来

一四
恋しさは母代小言に泣いた次
秋水とわが心を叱る浅田しき
人は恋を吾が心へ頼りけり
果敢なきは泡に似たる吾の心
子一人の心へすもぬ事はうり
子を叱る心のどこの恥しい
長男北心弱さを歯がゆなり
ハゲり云ふ日本語は上代空
泣きやめろ神の心にもある気
水や室百八十をやと越え
水鏡顔の上りく水すきし
ゴンドラの静に更けり半風琴
水枕氷割る夕に二時を聴き
けね釣瓶今汲んだらし月に揺水

水車潤水々鈴虫月へ鳴き

尊さは何んにも不足言はぬ母

○新井帶毎日一つ二つ殖え

日曜をわが寝足らない生欠伸

思は思不足は不足腕を担み

だつとんあの腫が夜半も附纏ひ

秋夜に虫の声々誰を呼ぶ

春雨は濡水々りくのも面白し

約束の時分に来たる宵の雨

寝たぐらに行来たを思ふ雨

春雨にすうし濡水々花鉄

雨の日をこえなむも其基に着水

入水させうきに云ひ可かず社會鍋

同情に狎水々母を狭く生や

同情がついこうなつた他住居

同情へ馬焼友んな噂立ち

マ、ドール抱き片言此子守唄

同情を仕合つ果ての世分別

正直を僻む心は嘘に聴や

あゝ何か云ふと不平を眺め

叱らぬ不平も云はず笑顔見せ

あ心を産褥へほめにかや

朧夜の二人若しやと後をつけ

疑を客つたりて大やこー

母親の靴は勿体ない五年

靴の穴又今月も叱からぬ

ハイヒルを履いて何ぶな、歩

母一人帰水々帽子持て果水

白狐では任せられ、譯を述べ
皿小鉢洗ふ女房、枕切ねた音
夷人を阿たらふなあと妻の顔
おとなりい、お子だと床やほめ刈り
頭より各んで掛かると白石を取り
虫干に移し、執拗く子に訊かれ
虫の音に誘はれ、足る月の影
母の瞳は只、あふたや、雪求む
降り積る雪地、さうへ餌を投げ
大内も目出な鶏の声に明け
東洋此平、わ鶏の鳴き啼く
お茶菓子には持参と云ふ仲のまゝ
茶化された酒屋が漸く何とぞ知れ
一帯が四円だなあと思ひだけ

其、俺に爲替、何んのか、
 眞帆、片帆二人の遙か前を、
 木クタイと袂、濱の風
 パラソルで指せばステッキつゞ立ち
 妹と行くニア人を、柳榆は、
 縋びへ、気軽に針と糸を持ち
 子と二人踏む、
 腹は立つ、又口先を丸める、
 室の音、仰げば、
 壁、穴、うめ、隠れ、額を掛け
 ネオンの灯子、
 煙たがられ、
 煙た、瞳が、
 蓄かづら、
 煙立ち

銅羅が鳴るに母祝の事
両方下悲し出船上と下
雪達摩飛び下直ぐ飯
子はボンチ祝の事は相場押
新宝の賣子もしたと立志傳
口紅は濃き艶めく洗ひ髪
打つ買ふの果てが養老院より
片意地を笑はれながら子三人
来る直ぐ憎む口を二つ三つ
ハネーン地圖下二人は話し合ひ
父やんは此處よと地圖で子に指し
かすの恨も逢へば云ひそびれ
恨むるは明けの鐘明けの雞
花よりも友の情けの情け

春兵衛や柳雨味舟想ひ出し
句作今カリーに川口に想を疎り
樂しさに増して別れのつらいこと
来年もこゝと友の胡かき
道づたに踏水ながら草の花
薬取り太の喧嘩へ手首を取り
玉子酒風邪気味へちと量が湯や
針と糸持って縫ひ呼び度し
廻り道しないようにと針を
子の喧嘩母親同志承知せず
顔の穴又雨の日をつらへ行や
お掃除もすんで乳房の子を預けし
氏神の祭は近い注連を張り
レコードは仕込み金の多傳おれず
イワ

鼻唄と口三味線が總い合は
 承知して帰れば妻が不賛成
 子の母がたった一つの不足だけ
 言い過ぎを咳で止めても懐越し
 フンが出来ると思ふ吐くは
 咳入少はあつて優しと背をすり
 ほろ酔の銜え揚子へたが吠え
 妻楊子出せば受取る子をええ
 ハイと云ふる事も軽い襷かけ
 乙化のる守康生若くも足しを
 通夜僧のお経をむげに夜は更ら
 むらさやと殊更らと下女に去い
 都合よく母が帰つて夜びるに
 不都合を云ふ者ならぬ四畳の残

故本多華芳先生追悼句

茶摘所やかき恩師は旅に折や
 マンサナ 巴水

真真正正浄土の道を行け
 青雲

夕吟をまゐといふ欲人の欲心
 玉圍

一週忌昨日のやうに思ふ今日
 鳥成

彈り道一貫句をいふ秋となり
 露光

貫き竹道へ恩師の慕は
 三本

在せ日偶びる追慕
 狂月

先生此句袋は見えぬ
 白梅

特別課題花

山本竹涼選

天位

木下城南

お浄土代便り
宵や多や彼山岸花

瞑目すはは
宵や多や事申し
上おなご風の音へ
耳を澄ませば
そのは虫代声
……
一宵は夢のやう

地位

雪冒一沙

貸しそ来た
た庭は白菊咲く便り

用そ讀めば
お錢も菊代白
うら多や矢張
シヤトルはなうらうら

人位

清水速舟

来多甲虫又う
阿ったせー
代いよ
乙化

殺風景なせー
ゲ系来甲虫が
あった。村人
下せそは
は境地は味へ
お、乙虫
うらうら
吾々も
奴力か
いたいと
思ふ。

客

1201

丹誠の庭咲く頃を雨移動
軟顔の散る一輪に秋深み
丹誠を沙漠の中に花畠
花咲けと咲きと矢張轉住地
風流が集つて月見草
花の種こよめに取る残る気
良い花だ種子を皆に望む
何事も忘れ配所に花を愛さ
一カ代心も知らぬ庭の花
濃艶な姿ダリヤ代、秋日和
賞められぬあつちの露と鉢
早く咲け早く咲けと水をやり
美しい指を折られぬバラ代花

草雨 溪山 漱凡 柳華 白子 白適 土偶 政菜 周南 愛柳 踏舟 露角 鏡水

咲や誇る菊を世和氣なまに折る
花辨へやゆる金魚の小さい口
轉宅も知らずタリやは咲や誇り
咲や白小吹を轉宅言ひつゝと
サンフラワ陽世廻る方へお辭儀する
花白小月ま或日の夢を追ひ
持ち寄りた花に埋もる師の墓前
野の花も一枝添へる墓参り

秀逸

発つ粒を花へ名残りの水をやり
風荒ふ曠野に百花咲き競ひ
君在りし日此押花よ誇り継ぐ
吉凶へ造花も慣れぬ婦人會
心なま人に踏みゆる世の二化

ひより

鬼氏

漱風

泉象

源心

かつ子

吾以知

牛水

草雨

のつ子

柳華

吾以知

ひより

お別れだ咲けよ大やうく菊の花

白 雀

一輪も君の墓前に手向く宵

真 澄

発つあぐに皆咲くのをあ鉢せ菊

桔 梗

囀 落 着

出勤へあうタイムある花 鉄

(客) 赤 雲

天地の恵み豊かに咲く聖花

(一) 狂 月

菊は花植へるは處も日本人

(一) 露 光

とリ／＼の花ふキャンパス夏景色

(秀) 三 木

沙漠も蒔けは季節の花を持ち

(一) 巴 水

へイヒーバー心と別な花の礼

(一) 白 舟

嚴然と秋の誇りへ菊の花

(一) 王 園

苦難も耐へる沙漠に笑ふ花

(一) 烏 城

軸

草花は花の心でセンチタの気のゆとり

故本多華芳先生一週年忌會席吟（九月四日）

天位（貴） 因心 岡田柳菴選

瞑想は恩師の顔にぶつつかり木魚
地位

恩怨も此世を限る棺の蓋向山

人位

老恩師な人にも云はず泣く草雨

五卷

二言う子に親の苦勞（拂り返り）九星

三因は恩男の竟地を持てあまじ向山

四泣けくと因心師を偲ぶ虫の声竹涼

五因心（報ひ度）氣のほけみ白子

六一言に恩とは言（ど）忘れ勝向山

秀

恩讐の立場に迷ふ第二世 九星

発奮の裏に因心師のあき強々 小枝

師の鞭を怨んだ過去悔事竹涼

改心はしめ、知った親の因心 かッ子

叱られた頃も悪く、恩師の眼一沙

親の恩しさを憂世に強く生き、かつ子

恩人に平氣で背く世を淋し 九星

黒人の亦恩を知る侍人傳 源正

更生を誓ひその日を因心に被る 一沙

因心を知る日本人にある誇り 土偶

叱られた事も御因心の數に介 草雨

恩報ひ氣付いた頃をチャップリン草雨

因心のある人と兎等に言ひ聞かせ周南

親の恩感謝の中に子を育て 白子

軸

師を追へば勵ます因心師の瞳

故本多華芳先生一週年忌同會席吟（九月四日、四三年）

集心

田代藤枝溪

天位（賞）

天じ、のり、事々の小錢も聞こみる竹涼

一せう顔ばかり集る浪花節

土偶

次、沙波の風吸いて来た娘（丸く集り

白子

神田戰益々集る野次郎の群

周南

人、集心人皆瞳浮ぶ師の次々

愛柳

不幸事（集心て助く人情美

白子

客あの時を思出させる顔が集り

柳草

盆踊暑さが人を佇立てる

白山

一高給を餌に集る軍需工

九星

電燈（虫も乱舞の蒸暑さ

白山

ニ逝きし師を偲ひて集る白會の灯

かつ子

耳よりなニュースへ集る轉住処

向山

三名子役満堂露の瞳を集め

かつ子

人だから急ぐ不安な赤かおれ

木魚

四娘の子三人集れば流行る看

一沙

集るて恩師の故事へ夜は更ける

愛柳

五母鶏が餌を見付けたおんを

竹涼

榎の中樂々集る趣味同士に

九星

六同情の心が集る二香の煙

草雨

人の寄るところへ矢張り跋を集ひ

草雨

佳和やかに集る恩師の二週忌

白子

榎友の集るは恩師の存る體に

周南

今宵きり出葵の友を取りかこみ

かつ子

人情は薄れ集る人の教

愛柳

人込の中に女のいのちの香り

自通

軸

遭難の暁（集る人情美

草雨

いだ事へ集る下る趣味の友

本多先生を偲ぶ句会

席吟、多、木村周南選

天二部屋を占める隣のもめる声 藤枝
地新婚の出所(多幸の手を握り 草雨
人妻の意も汲でからする寄附のたか竹涼

五客

一高給が招く出所の人の群 柳華

二阿比程の荷が治った部屋の中 九星

三教知れぬ野、福平和を只祈り かづ子

四争覇戦どつちも敗けぬ野次郎の群 土偶

五年老へて氣強く思ふ子澤山 白子

七秀

スメルトが何時迄續くメスの血 源正

厚化粧時に思はぬ處の皺 向山

セージ野に思はぬ季節の花の教 九星

咳拂ひ妻の多辯をたしなめる 藤枝

エバキユ一へ白髪が殖た洗髪 竹涼

四時間を喋り通して汗を拭き 土偶

勇敢に軒燈おそう火取出 源正

軸

こんなにもあるかと思ふ荷を纏め

席吟、憧れ、横田草雨選

天青春の憧れ雲の飛ぶ彼方 柳華

地憧れの故郷を偲ぶ秋の風 憂柳

人交換船母から聞いた母の國 源正

五客

一青春の憧れ思慮のない動作 一沙

二憧れの交遊に期待の裏表 憂柳

三憧れの都へ還る日を数へ 周南

四憧れの祖国へ便りを赤十字 憂柳

五憧れた出所取消す意が出来 竹涼

憧れの都場末の間に咲き

竹涼

憧れる自由は柵を越ゆる夢

一沙

憧れの都市排斥の風が吹き

九星

落ちる陽（故郷の空と立ちつくす

向山

今の身に妻の夢（瘦細る

向山

憧れた都に住んで不足がち

自適

憧れた出所を悔いる日々汗

柳孝

憧れの牧師の夢に娘と語る

自適

憧れて出た程ない娘の便り

藤枝

憧れの都（遠く 收容所

木魚

自句

土牛の草二人都へ帰れる

九月四日当夜の出席者

竹涼、土偶、自適、向山、柳孝、藤枝

白子、かろ子、木魚、九星、周南、空柳

草雨、源正一沙、の十五名であった

汗¹²¹ 互選 八月七日

失業も汗人並に百十度 源正

汗性の化粧午間取る目出度日藤枝

夏瘦もせず育子の鼻の汗 竹涼

洗濯場豆の汗と笑ひ合ひ 草雨

一日の汗を洗って京台 森村

用水路汗の雪も流れ来る 夢柳

玉の汗タオルに包む一休ヶ 自適

勤勞に尊い汗の拭き心地 藤枝

子の蘇汗家庭 医学線つくる 土偶

一年甲奉仕の汗の口所 竹涼

口¹ 互選 八月七日

嬉しさに秘密にうけた母の口 草雨

人の口嘘と誠の光るとこり 草雨

口教は利かぬとウソと言ひ腫 土偶

おもしろ口を同じう思ふ 藤枝

以下略

村田周魚選

緑の序曲

小西由春

スケートがすたと自轉車ねだれる
友情にすまぬ帯を立て、みる

奥原雨人

大膽に晝の喫茶で逢うる
ひとくと女二人に涙あり

本多華芳

イエースとた、言ひかけて利かない
餅菓子へ手が出る燈酒がはね
手拭地矢張寝衣にすると決め
一も二も無く晩酌、父承知

拾ひ讀み聖書手にする妻の留守

ポケットは突っ張つてゐて空ホテル

サインして宿帳ニ三枚緑、うれ

ピアノ弾く傍で唄つて父叱れ

郵箱に焦い一日を娘はふさぎ

吉田未六

トネルを出ると話題が変つてゐる

看護婦は湖の利りてる音を立て

看護婦も醫者と同じ嘘を言ひ

成瀬典正

奥太春にされて氣樂な酒の味

にござる語尾へ薬局心得る

春の宵折った頁へ金があり

寺沢無患坊

立身も出来ずネオンの灯に浸り

捨てた氣の女に觸れる春の宵月

(註)

(この頁は、さ、やり第十八巻第五号)

あ二十九頁であります華芳氏の
九句ははきいてゐます。

作句三昧

峰香迂人

九月四日午後七時から第八区社交室に於て
本多華芳氏一週忌を催す、室の中央には神原勇馬
撮影寄贈になる華芳氏の字真を飾る、土偶氏竹涼
氏藤枝氏かつ子氏諸氏の丹精になる花々が色と
りくの美しさで飾られ、皆様からの献上句が供え
られる、八時前出題「思」^思「憧」^集多九時半締切である、皆
思ひくの席に寄つて作句三昧境に入る、竹涼氏はと
見れば一生懸命に葉書と自画自讃の麗筆を振つ
て居られる、土偶氏はあの大きな体をソリーフハー
に埋めて童顔を綻ばせ、向山氏は不相変高僧の無
言の行、自適氏は端然として村夫子の如く、九星氏
亦黙然たり、周南氏人も知る饒舌の士、饒舌なく
りては作句心が起らぬと言ひ、凡介人、大北同会華か

なりり時代日老禮で盛に柳人の腹の皮をようせ
た、其當時からのよき相手であつた。かつ子や史は
今夜はどうした風の吹廻しか岡南氏が盛に誘の
水を向けるも取合はず只微笑で答へるのみ、藤枝
女史は隅の方で白子や史と共に旧研究会の思出
話でもして居るらしい、一沙氏は相憎百幾度かの
熱を押しての出席故か蒼白な顔へ疎髯を見せて
平生の元氣もない、草雨氏はあの巨体を椅子から
はみ出せてニコくとして天位を組へば木魚氏精
悍の氣魄を全身に見せて在り日の葦芳氏の傍を
追つて居るか？ 源正氏黙然として一ヶ處を凝視、
愛柳氏は速射砲的作句への自信が悠々然と顔な
い見廻して居る等、皆葦芳氏の在りり日を偶が和
やかさである。寄せ書をや仕合つて十時半散会。

川柳街頭

耕友人

近頃の様に腑に落ちない川柳が跋扈す
 ると先輩の意見が聞きたくつてしよう
 がない、打ちとけた諺は聞けぬものかな
 x x x x x x x x x x
 元の大北川柳会同人は皆本多華芳先生
 との關係が非常に深いわけだとして一
 大恩もあるわけ、恩師を忘れる様うな事
 ありとしたら、それこそ罰の當る事受合
 x x x x x x x x x x
 或る画家に言はせると繪を觀てその作品に難
 打ち如ないものよりむしろ其削で余裕あるもの、完全
 近に一步を残すもか面白いと言ひ、川柳で
 も新人に新味のある作品を多く見受るが残念な
 ら余韻のない事と、表現方法に重きを置き置かぬ
 役になるのが多いのではないだろうか。

ローヤルオーク市ミシガンの清水速舟氏の柳名はこの四五ヶ月何處の川柳句集にでも出てゐるが、その多作振に實際驚くのである。

日本一の多作家として知られてゐる人も同姓の清水美江氏である、北承にも逐舟氏が居つてうれしい。

x
x
x
x
x
x
x
x
x
x

・雜詠

(十五回) 總句 百三十一
振句 四十五

清水迷舟選



ミミカ 北村源正

時事ニエスジャツプと叫ぶを氣にとめず

初老まだ若さが残るグイタミン

ニュースマン世相の裏を見てホクキ

百十度脂肪過多の置き所

コードウエル 田村深雪

夢にして諦め切れぬ世の遷り

朝日未だ出ぬ間を庭の草せしり

過去の夢泣かない筈が泣けて来る

面影は別れたまゝのあの次女

ポストン 矢形溪山

叱られる母がある身を煮込まれ

言ひ張った同士氣まづ朝の卓

見當のついた所外(宵)を飲め

ミミカ 横田草雨

二度の夏砂漠に慣れた皮膚の色

涼台此所もお人なじ噂なり

日盛りと別に無帽の子等の声

デラン 本田露角

お隣の水で遊んだ子の嘘

下部屋が埃を浴びる東風が吹き

越境を笑って頼む物干場

ミミカ 小町谷奉君

胃潰瘍隣の皿へ眼を開ける

同室の者が煮て退院日

ミミカ 市川土偶

蚊の多いところだ空いてる涼台

醜さの個性見つけた人減り

ミミカ 野間一沙

素足の子何か食べた腹具合

思出にユウカリ樹のある母校

ミドリカ 山本竹涼

散髪を出るといきなり埃風

太陽の光に慣れて熱い思ふに如

ミドリカ 藤原静志

夢と知る床にはつきり母の顔

故郷の夏青い畳や麻の蚊帳

ミドリカ 今場潤風

山肌も見へてキヤンプの夏青し

シガレット投げて未練は未だ煙リ

ヒルクリスト 野田鏡水

虫の声病舎静かに灯が消える

ちっぽけな貯金へ妻の眞剣味

ポエトン 島原潮風

共に住む砂漠に歴史流れよる

板壁の隣やりにばり國訛

ミドリカ 三藤菱柳

夏草の波(沙漠の回顧録

夏帽子自給の畑へ灌ぐ水

ミドリカ 熊代向山

女房を鎗玉にする 飲仲間

引窓へ寐られぬ宵の流星

トマス 二階堂法水

同じ事幾度問はれた 柵の中

戦争も忘れ音頭の輪の手振り

逸 名

インダンヤされてしまふ未の味

晝までが日暮になつた暮の帰り

ミドリカ 平田かつ子

世渡りは人の更けに過ぎる

母の愛しかる堪へゆく世の苦勞

ランケアワ俺が天下の青天井

辨当箱枕の顔に青葉風

川柳峯土香(二十六回)

朝

矢頭自捕獲

前拔

朝顔(隣の人の世辞を聞き

朝ぼらけうつの響き夢うつ、

朝起きて眺める瓜は手をつなぎ

ハッケーキ抜きに日曜床に居る

無意識で居られぬ朝の陽を拝み

失業のやつぱりメスの鐘に起き

朝すゝの元氣昨日の苦をせむ

夜遊の朝餉(小さく父と座り

目覺が鳴るやうな夜明前

客

管案が出来て朝からいゝ元氣

朝露と十六種の畑に立ち

美涼

美行

静志

湖風

トシ子

無名

東沙

向山

鬼氏

静五

源正

明朗な朝なり太陽窓に来る 一沙

朝の夢ミルク車の音にため 愛柳

子に負けぬ氣で居る朝の新呼吸 土偶

三光

人位 神津白子

目ざましは隣も起す壁合せ

地位 横田草雨

出勤のトラップへ朝の氣が揃ひ

天位 山本竹涼

立番の交代見てる朝の月

軸

朝紅の當が外れた水をやり

川柳峯土香例會

席吟「舌」自適選

天位

母の脊廻らぬ舌で月の唄 竹涼

地位

食ひ足りて鼻を撫てる牛の舌 竹涼

人位

医者のかみ通りに娘舌を出し 土偶

客

二會の何にかさげてる舌もつれ 源正

まわらない舌で真似てるはやり歌 白子

飲残りやと見つけた舌つみ 土偶

久振美食に舌の短過ぎ かつ子

まの舌を打ちする子をうれしが 源正

水切舌がもつれる盆訓練 藤枝

川柳峯土香同人吟

山本竹涼

母一人淋しがうせて出所する

いたんばに母の遺訓が身に沁める

倅を祈り続けて貧に慣れ

逆境を生抜く味方に十七字

セーザ原月皓々と底い屋根

清水迷舟

戴いた方も汗ばてメスウ皿

妻の留守ボタン位はつける針

あさがり父には狐舌を柄で合

軍服はボタンをみながけて汗

沿岸へ帰る話も妻相手

川柳峯土香第二十七回課題

熊代向山選

「多忙」

健吟



夜更しが祟る多忙の事務デスク

猫の午もほし、嫁く娘へ祝客

満負の愚者、に好かれ十九弗

収獲へポスターで呼ばマシパワ

家を出るまで、忙し、娘の勤め

客

ハクヒル忙しさに蹴る舗道

晝近く母は厨で汗とゐる

忙しさを樂しむ日々の幸になる

轉住へ殖へた荷物の紙め方

ゆとりなき心へ通ふ三味の音

轉住の日は迫つてゐるハマの音

愛柳

静志

迷舟

源正

草雨

城南

城南

立上

深雪

一沙

速舟

奉仕する多忙の聲にある誇張
愛柳 据膝でゐても忙しい主婦の趣味
草雨 予のできる度に世間へ遠ざかり
露光

人位

北村源正

マンパワ―集めて廻り切れぬ秋

一切が統制の戦時下、怒嗟の声も聞

き飽きた、解決はつまり人間の力に

待たねばならぬ、時事吟の多い中に

地位

山内狂月

手一杯またも子供に汚される

(余り平易に讀まれてゐるが「手一杯が」

効果を納めてゐる、補ともすれば硬直

な漢語をカサカサと勝ち、傾向へこ
れは又一考味讀の價值が溢れてゐる、

天位

山本竹涼

初産の夫たるもの飯を焚き

(間の抜けた忙しさを見るやうな作者

の體験が主観へ歸して、僕れた曾我

迺家劇的一幕、川柳独得の境地だ

修辭敘法大いに学ぶべきである

軸

忙しい中へノソく懷手



36

雑詠

市川土偶

顔負けのしてる娘の子代やり場

腫りと勃く女代染めた爪

極樂の法話にニ舌欠伸す

安波女の借こぎや通らぬ顔に逢ふ

一時は素直になつてベンチまで

一医者で見た友と躊躇にジッケ堀

日曜の作品

豚 互選 高貞順

副業に豚を飼つる人全廻り 竹涼

マ、豚のエプロンかけて廣告画 源正

豚の首リボンが下る優良種 自適

豚小屋を覗いたら娘ハム嫌ひ 竹涼

吾れ豚に押除け合ふ豚は喰ひ 土偶

猪はこんなものさよと豚を見せ 一沙

養豚所働く人が痔で見え 草雨

足の音喰せるおのと豚騒ぐ 土偶

喰ふ寐る豚一生を太く活き 草雨

来る 互選 高貞順

交換船来る日もあちう郷里の夢 源正

空席を乞はれてゐる案内者 草雨

シゲナルは赤敷分の踏や場 一沙

確足に来たとも言はずばかり来る 一沙

又来ると妹勧誘の二人連 自適

統制が来る日事の懿があり 一沙

假名文字は親うをつなが来る便り 土偶

来屏は竹外で見よう月見草 愛柳

豫期した通り氣短や来る 土偶

素晴しいエースを持つて春みに来る 自適

来るやうな音が通つて汽車はまだ自適

また午残東部の夏の住心地 愛柳

犬 互選 高貞順

河へ来るとほうに暮れる犬の鼻 自適

案内のやうに先き失き犬の鼻 一沙

藝一つ覺える夜にピスケット 源正

犬連れた女と夜通すれ違ひ 竹涼

欠伸と好犬も眞夏らしくなる 一沙

野良犬も舌をたれてる百十な竹涼

山の中人が住んでる犬の声 竹涼

日曜の作

落る 一五選 高英順

流れ星故郷の空へ消え行き

泣いた子の赤振返る 落物

人の世へ風に任せろ 落ト下

落芽が二度も續いた立老傳

有防車落雷とか 砂煙

母の文最後であつた一 下

落合と又の日を 繰返し

落ト下 特にお覚悟(眼の熱さ)

洗濯場噂が寄つた落物

落着

宇着の葉書(一家懸り)

落つておとも暑さの百十

落つて難けは虫にもあるリズム

てん疳の落ちつく迄をほつとかれ

十万の一真として取る動作 一沙

吾の家となす落付くギヤンの灯草雨

一杯の水に落付く山登り 土偶

請合つた午残男を出す煙草の輪竹涼

繙裁の一日と云ふ 閑あり 一沙

満壘(自若と立つたニユー投手 草雨

順々に午頃がゐる 親に 源正

春(と見ればそうとも取れるなり 土偶

忙中に閑ある如く 伸むる膝は 一沙

不意な火車日頃の教養を忘る竹涼

線 一五選 高英順

戦線の目暮さになれる台所 竹涼

線引つてやっぱりまがる筆のくせ 土偶

脱線とうまく司會者席を濁し 土偶

納豆の線を引くは出来具合 自由

セルロイド



まゝ事の医者はロイドの眼鏡越し竹涼 素足の子何か食いたい腹具合一沙
キヤンプ住ロイドの血を詫いで出りゝゝ 悪を知る頃の素足は染めてゐる。ワッ

セルロイド子供は顔に當てゝみる 自適 泥の子の素足のまんま逃げ廻り 源正

吊つたまゝ子に遊ぶせるセルロイド柳華 夏の宵素足氣になる蚊の多々 愛柳

セルロイド總入歯して 飯の味 源正 獨身者 互選 高貞順

セルロイド子供は顔に當てゝみる 自適 ばうり出てばうりと帰る獨身者一沙

國交と共に断へたりセルロイド 愛柳 獨り身勝手な主義で生々ゐるゝゝ

素足 八月一日 獨り身にかへれば野心ある話一沙

水虫がいつか治つた裸足の子 土偶 貯めろる獨身々の故い耳竹涼

靴脱いだまゝ泣きく子は帰りゝゝ 友達のパラソクに居候獨身者 自適

沙遊の素足に慣れた皮膚の色 竹涼 二の句には嫁を出される獨身者ゝゝ

停電に素足冷たいものを踏みゝゝ 兎ぐの動機を云はずオルトミスゝゝ

釣竿の素足になつて草の露 留守勝を隣を聞けは獨身者土偶

踏みぬる上に足形重々し 自適 孤獨尚希望は多し柵の中 愛柳

下駄の巾しつくり日本人の足



帽子もう十六帛の汗かしめ 自適

ウインドにはやりの夏帽教へられ 竹涼

ハットもう斜にかさる声変り 源正

つわスター帽子を締め身構一沙

焼香ハットのまゝで女出る 竹涼

春の宵阿彌陀にかさつた千鳥足源正

土俵極帽子をなじる行司立ち一沙

盲人も聞けばハット好き嫌ひ 竹涼

腹の立つ事あり帽子鷄揃め 土偶

丈くうへ父は帽子のまゝで立ち みゆき

「豆選」 弾く 高美順

鳳仙花音を立てる午下り 土偶

パプツンの音を立てる良にほい 土偶

爪弾きされてた人まり野めある 草雨

土を這ふマーブル子等へ陽が廻り 柳草

マーブルを持って姉妹は云ひつり 自適

40

唯か来た今の音して声を下げ 竹涼

弾かれた音で咲き出す月見草源正

腹立ち出て行くトアの因め具合草雨

社会村を歩いても世間の爪弾き愛柳

逃げ惑ふ家畜の脊に散る霰土偶

静 豆選 高美順

八月二十九日

更け行く沙漠の秋の北斗星 愛柳

静かあ子覗けば爪を染めてある 竹涼

留守もなく晝寝のトア同じ居る自適

静かある芝生の朝の鳩の教 奎柳

金魚鉢生きている音の底の底 竹涼

午二時三時未を起きてあるペン音 竹涼

静かさは枕の響く腕時計 愛柳

午内職子なき夫婦の上居る所 竹涼



峯は香川柳

雑詠

市川土偶選

第十六回

山本竹涼

看更さす赤坊の足風を蹴り

母親の天覧もつゝ軽ハ咳

槍のやう相なり出す 竹の穴 (客)

清水速舟

下駄の音も減りし 轉住一ヶ年

未だ夏の海を忘れぬと云ふ (秀)

来年のササノハパンツ裾を折り

横田草雨

お手制衣の三味で軒家の下生

子の帰りうしろで知つた壁一重

出勤をトラウコにほれえうに積り

野間一沙

広告の隅に閉店する理由

先頭に歌あり続く足の巾

額面の大きさをヤギを糺される

熊代向山

あの嫁を見よと近處で娘を寝け

炎天下に不貞寐のやうな西瓜畑

質よりも柄の浴衣を床しかり

田村屋雪

火天を飛行機席しそに行き

せせせと叫びと答へぬ夢は覺め

電報にやつと赤坊の娘の旅路

庄田露角

赤蜻蛉新れて残暑を舞ひ日暮 (秀)

待ち針を打て晝寐へ持つうちわ (秀)

幕の間に星を論ずる露天劇

木下城南

夏に渡に苦味ばしつた月 畠山 (秀)

葱坊主は夏夏の鼻に部隊めき

北村源正

要要に出て冷い風にあたる来 (客)

メッセーレ御室の言葉に瞳かうる

十田や美奈

お隣の料理かわかる 壁一重 (秀)

土筆土香の土人めさる裸人坊

矢野鬼氏

焼移る危険のかれた 風の向

目覺をかけて夜釣(早寝する)

一平田かッナ

ほゝ笑を涙初めたる 娘の膽氣

予期の世へ朝々世の 探呼吸

市川静ナ

出征した夫にすまぬッナ水

味噌汁を賞める主人の 日本語

富田露光

蜘蛛の子を散らしたやうに 映画はね(客)

撒水の見る瞳に涼し 草の色

三藤愛柳

風の空煙は速い 地平線

明日は完つ名残りに事の 国料理

神津白ナ

所在なく暮す此身にして 暑さ

軍服の二人へ世の 瞳はさる々

寺村美恵子

可也布を待つ 同行未考へる

約束を守り通して泣ける 日々(秀)

小川静立

直ぐ利する事も 悟れず一人 勘ぬ

早水白舟

久闊かりいつちも 買けぬ 膝口の教

登森木魚

深窓に育つた云々 外見と 張り

山内狂月

派手好き何時も 噂の程を 待ち

今嶋 三木

病床の身へ忠誠を誓はされ

橋本京詩

諦めし世帯も持った柵の中

特選二句

横田草雨

水泳看住人だ港の香が残り

移動した以前の事か聯想され感懐
轉た杜若と得ないもうあうう、

野間一沙

英雄の淋しさを知る夕刊紙

一代も風靡した英雄の末路、ト五に
依て其全貌を遺風よく描き出した
手腕敬服に値する。

集句百四十句 採句四十九

141

次回課題

動物と子供

十月十日締切

雑詠十句

家

十月二十日締切

雑詠十句

見本

十一月十日締切

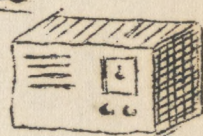
投句はすへて

六十、D、

野間一沙宛

6-10-8 Hunt, Shaleo.





峯土香川柳吟社會計報告

前月より繰越金

一金拾五兩九十五仙也

一金貳兩八十三仙也

(重利貸預金ヲフクム)

特別寄附金及び會員費

一金七兩也

合計收入金額

一金拾七兩九十五仙也

支出の部

一金参兩五十仙也 (欠リシセル)

一金五十仙也 (フラワキス代)

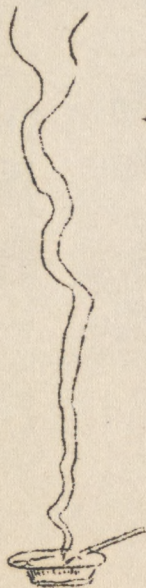
一金壹兩三十五仙 (切手代)

一金九十仙也 (茶菓子)

合計 六兩拾五仙也

差引残額 拾壹兩八十仙也

八月一日 — 九月十五日 一九四三年



飯事の
夫婦

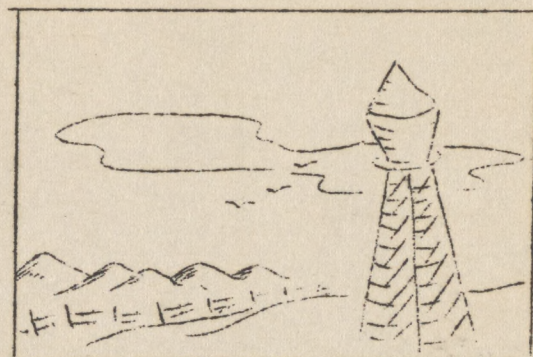
かきまは
別な恋

竹京魚



編輯室の窓

中田一沙



北村涼二氏の在任涼氏より多大なるヘルプを得る、
編輯部異状なり有様なりした。

『女房役つとめ』呉竹友が所

九月三日 ハト山川柳吟社通信

『故華芳先生を偲ぶ』句會を三系吾以知氏の宅に於て
催すとの由氏の徳が慕はれざるを憾とし思ひました。

①思ひ立ちたる吉日とか、故華芳先生の
一通忌號刊行に拍車を掛けました。
柳人諸氏には故華芳氏代思出が非
常に多いとす。今回は限がせいで、
思出を割愛する事にいたしました。

②華芳氏の遺作書翰を柳華氏
より得ました。編輯に就いても今回は

◎ 去年の九月二十六日はミネドカ吟社が創立された思出多
や日下にあります。変化多々一ヶ年留を、あつ返る時
抑人の移動などもあつる感其量下にあります。

◎ 市川土偶氏も一時出所する事になりました。
木下城南氏もユタ州で壮健との由通信があり
やゝ多。

◎ いふ井添氏望月九星氏をツール湖へ送る句會は九
月二十日十六日木村周南氏宅に於て催す事になり
ました。◎ 仕事に傍の編輯頑張りを足せる積
りてすのち急なところにはあつてを今ふ次です。

九月十七日



